

「日本のイヌの歴史」

京都大学名誉教授 茂原信生

1、はじめに

日本のイヌの歴史を考えるうえで、イヌの飼育者、あるいは共同生活者の日本列島人の歴史をみておく必要があります。イヌは、ヒトとともに移動するようになったと思われるからです。日本在来犬のルーツも日本列島人のルーツと深く関わるテーマです。

日本列島人の歴史は、沖縄県の白保竿根田遺跡などから新たな旧石器時代の人骨が発見されて歴史が書き改められています。今のところ、最古の日本列島人は4万年前頃に日本にやって来た人びとということになっています。しかし、その起源地に関してはいまだに分からない点が多いのです。以前は、縄文時代人は南方起源で、日本全体に形態的にほぼ一樣な人びとが生活していたということになっていました。しかし、ここ20~30年で古人骨の資料も多くなり研究方法も多様化し、さらに遺伝子の研究が飛躍的に発展して、今までの日本列島人のなりたちについての考えを根本的に改めなければならなくなっています。縄文時代人にはかなりの多様性、特に遺伝的な多様性があることが明らかにされてきたのです。縄文時代人が比較的均一だと思われたのは、弥生時代に大陸から渡来した人びとと比べると均一にみえたということに過ぎなかったのです。

縄文時代人がいた日本列島に、大陸からいわゆる渡来系の人びとが移動してきたのが弥生時代ですが、

この海外からの移動はこれ以降もずっと続き古墳時代くらいまで続いてようやく現代日本人の基礎が出来たということになります。日本列島人はいまだに両者の混血が進行中です。平均的な現代日本人はおおよそ縄文時代人の遺伝子を10~20%ほど引き継いでいるといわれます(篠田2019)。もちろん混血の進行にともなう地理的な変異があり、その地方変異は混血の進行の度合いを示しているものです。

日本列島人の起源についての考えが変化すると当然のこととはいえ日本在来犬の祖先に対する考え方も変わってきました。古代犬でもヒトの場合と同様に遺伝子の研究が大きく進み、さらにイヌの発掘例が増加してきたこともイヌの研究が進む大きな要素になりました。しかし、発掘される数が多くなれば個体間の変異は大きくなり、多様性がまして形だけでは祖先を追跡することがむづかしくなってきました。もちろん、多様性があるといっても狩猟採集生活をしてきた縄文犬としてのある程度の共通した特徴があるのも事実です。以前からいわれていた縄文犬の特徴を大きく離れるものではありません。それを明らかにしていくことが私たちの目標になりました。

2、各時代のイヌ

A.縄文時代のイヌ（写真1,2）

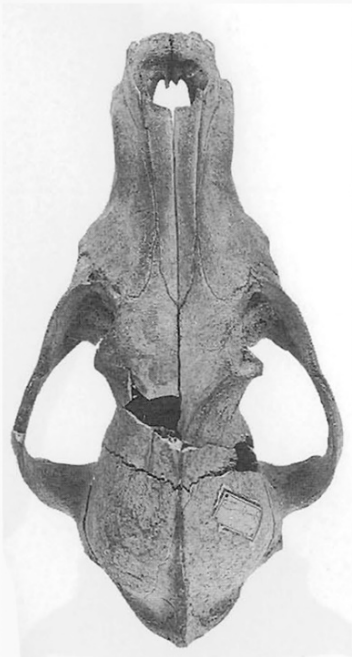
狩猟採集を主とした縄文時代は、今から約1万5千年前から約3千年前までの、1万年以上にわたって続いていました。3千年程前に稲作の技術が日本に持ち込まれて縄文時代は終わり、農耕を主とした弥生時代が始まったということになります。

縄文時代には数多くの遺跡から多数のイヌが出土しています。の中で、最も古いイヌは、神奈川県縄文時代早期の夏島貝塚のもので9500年前ということになっていました。この年代はこの遺跡から出た他の動物骨から年代測定されたもので、出土したイヌの骨そのものの年代測定ではありません。イヌそのものから年代測定されたものでは、愛媛県の上黒岩岩陰遺跡から出土した縄文時代の早期（約7400年前～約7300年前）の層から発掘された埋葬犬がもっとも古いこととなります（Gakuhari 他 2015）。縄文時代早期の遺跡からでたものは他にもあり、例えば佐賀県の東名遺跡から出土した約7000年前のイヌがあります。

それらよりも古いものはありませんから、日本のイヌは日本列島以外から持ち込まれたということになります。現在その祖先さがしが遺伝子の研究で行われていますが、まだ十分に解明されていません。イヌはつながれて飼われていないことが多く、交雑も比較的自由なので遺伝子の研究はその多様性、とていか特徴のなさのゆえになかなか実態をつかめないうでいます。

縄文時代のイヌは、全国的に見ても形態的にかなり小さいものが一般的で、大きいイヌはごくまれです。例えば、渥美半島周辺の遺跡からは頭蓋最大長が♂155 mm、♀143 mmという♂♀ともに小級のものが

写真1：縄文犬の特徴。現代のシバイヌとは大きくプロポーションが異なる。縄文犬は頭蓋骨の横幅が相対的に小さく、吻が短い。プロポーションの違いがわかりやすいように両種の最大長を同じ大きさに合わせてあります。シバイヌの頭蓋骨の形態も多様なので必ずしもこのようなタイプばかりではないが、典型的なものを示しました。



縄文犬



シバイヌ

出土しています。古代犬の大きさ区分ではよく用いられる長谷部言人（1952）の型区分でいえば小級で、現生のシバイヌよりも小さいイヌです。

縄文時代のイヌは、かつて私自身もそう思っていました。が、形から見るとほとんど一系統のように思われてきました。現在では発掘報告が増加した結果、多様性が指摘されていますが、大きく見ると形態ではやはり比較的均一な特徴があります。それをまとめると以下ようになります。

- ①ストップ（頭蓋骨の前頭部から鼻先にかけての凹み：額段）が小さいこと。これは、オオカミに近く、より原始的な形質と考えていいでしょう。
- ②顔が細いこと（吻が長く、頬骨弓の幅が狭い）。
- ③四肢骨が全体に頑丈なこと。
- ④歯の磨耗が顕著で、歯が折れるなどの損傷が多い

こと。

縄文時代のイヌの役割は、番犬としての役割の他に、狩猟に用いられたと考えるのが一般的です。縄文時代の生活はおもに狩猟採集によっていたからです。縄文犬の顔が細みだったり、ストップが小さかったりするのは、咀嚼器官がよく発達していて吻が長かったからです。これと関連して縄文時代のイヌの歯には後代のイヌにはみられないような激しい損傷が多く見られます。例えば犬歯が折れていたり、裂肉歯（上顎の第4小臼歯）が割れていたり、など数多くの例が見られます（写真3）。現代のイノシシ猟に用いられるイヌにも同じような歯の損傷が見られるといます。もちろん骨折などもあります。縄文犬が現代のシバイヌよりも四肢骨が頑丈なのは、このような使われ方が影響していると思われまます。

このような役割を担ったイヌは、当然のことながら縄文時代人にとって重要な存在であったと思われまます。埋葬されている数が多いことがそれを示しています。縄文時代の遺跡から出土する食用であった他のイノシシやシカ

ニホンオオカミ



縄文犬



中世犬



シバイヌ



写真2: ニホンオオカミ、縄文犬、中世犬、現生シバイヌの側面観。

縄文犬は鼻先から額にかけての凹み（額段:ストップ）が小さく、オオカミに近い原始的な形をしています。シバイヌのストップが大きいのは咀嚼力の低下による変化と思われる。ストップは中世犬では大きくなり、シバイヌでは顕著です。

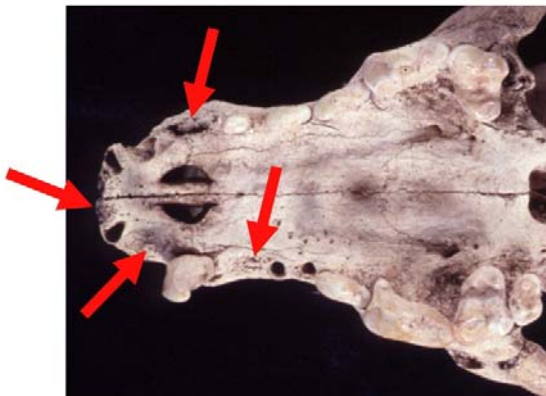


写真3: 縄文犬に見られる著しい歯の損傷の例。

いずれも田柄貝塚から出土したイヌ。上の写真では右の裂肉歯が半分に割れています。下の写真は、左の犬歯が折れてなくなっており切歯部（左右の中切歯、右の第3切歯）や第1小臼歯も脱落しています。

などの動物には解体痕が見られます。しかし、イヌには解体痕がほとんどみられませんが、皆無というわけではありません。例えば、千葉県の下遺跡から

出土したイヌには切痕がみられるという袁・加藤（1993）らの報告があります。埋葬されたイヌがみられると記しましたが、それ以外にも多くのイヌはバラバラの状態に出ているのです。この状態になった理由はなかなか説明がむずかしいですが、これらは食用にされたのではなく、埋葬された後に攪乱などによりバラバラになったと考えた方がいいでしょう。食用にしていたとするには余りに出土するイヌの個体数が少ないからです（金子1989）。解体痕は全国的に見て少数例で、イヌが積極的に食べられていた証拠はありません。弥生時代以降のイヌが多くはバラバラに出土しており解体痕も見られるのとは明らかに扱いが異なっていたと思われます。

イヌの扱いが他の動物と異なっていたことを示すものとして、イヌとヒトの合葬が報告されています。しかし、合葬の例は少なく、ヒトとイヌの墓域が共通することはあっても同時に埋葬されたかどうかは

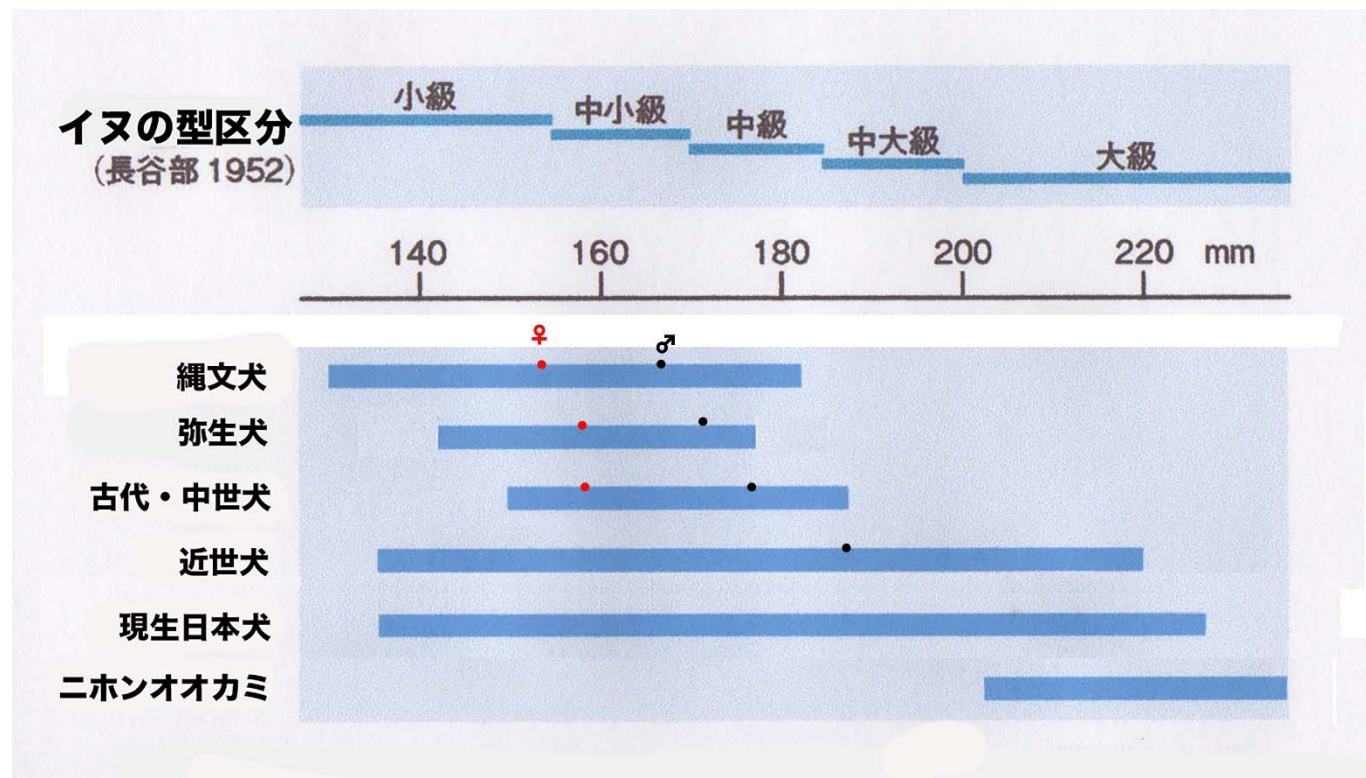
不明なことが多いのです。最近では岩手県の近内中村遺跡から出土した縄文時代後期後半の合葬例が報告されています（鎌田1998）。また、吉胡貝塚でもヒトとイヌの近接した埋葬例があります（山崎・茂原2007）。山田（1997）や山崎（1985）によるイヌの埋葬についての論考もあります。ヒトとイヌの合葬についてはこれからまだまだ研究が必要でしょう。

B、弥生時代のイヌ

弥生時代に大陸から稲作の技術がもたらされ西日本から次第に東日本に拡大していくにともない、日本列島人の生活は狩猟採集生活から平野部の農耕生活へと変化していきました。農産物が蓄積されることによって集団同士のたたかいなども多く発生するようになり、ヒトの骨にも切断痕など争いの痕跡がみられるようになってきます。農業は人類に飛躍的な文化的発展をもたらすとともに争いも持ち込んだ

図1：日本の古代犬の頭蓋骨最大長の大きさの時代的変異。

それぞれの時代の頭蓋最大長の変異幅を示しています。黒い点はオスのおよその平均値、赤い点はメスのおよその平均値です。発掘例が増加し、単純な変化ではなくなったが、時代を経るにしたがって次第に大きくなっていくのがわかります。縄文時代の中に大きいものが含まれるが大きなものはまれです。



ことになります。縄文時代と弥生時代は人と人との関係に本当に大きな違いがあります。

狩猟採集生活から農耕生活になったことで狩猟に対する価値が相対的に減退し、それに伴ってイヌの猟犬としての価値も減じたのだと思います。弥生時代のイヌはどんなものだったのでしょうか。主に西日本から出土している弥生時代犬では、縄文犬よりもやや大きいものが多くみられます(図1・図3)。埋葬されて出土するものはごく少なく、多くが散乱状態で出土しています。明らかに縄文時代とはイヌに対する扱いが異なっています。例えば、大阪の亀井遺跡から出土したイヌは埋葬されておらず、溝のようなところからバラバラで出土していました(宮崎:1982)。大陸から渡来系の人びとによって新たに持ち込まれた食習慣と食用のイヌの存在が考えられます。後述の遺伝子の研究でも縄文時代にはなかった遺伝子の型がみられるようになります。

西本(1997)は西日本の弥生時代の動物質食料の中で、イヌは埋葬されたものがほとんどなくバラバ

ラに出土していると記しています。食用のイヌはシカに匹敵するほどかなりの比重であったと述べています。鳥取県の青谷上寺地遺跡から出土したイヌは、多くはやはりバラバラで出土していますが、なかには埋葬されたものもいたといいます。イヌの扱いで言えば縄文時代と弥生時代の混在する文化的な要素が垣間見られる遺跡です。

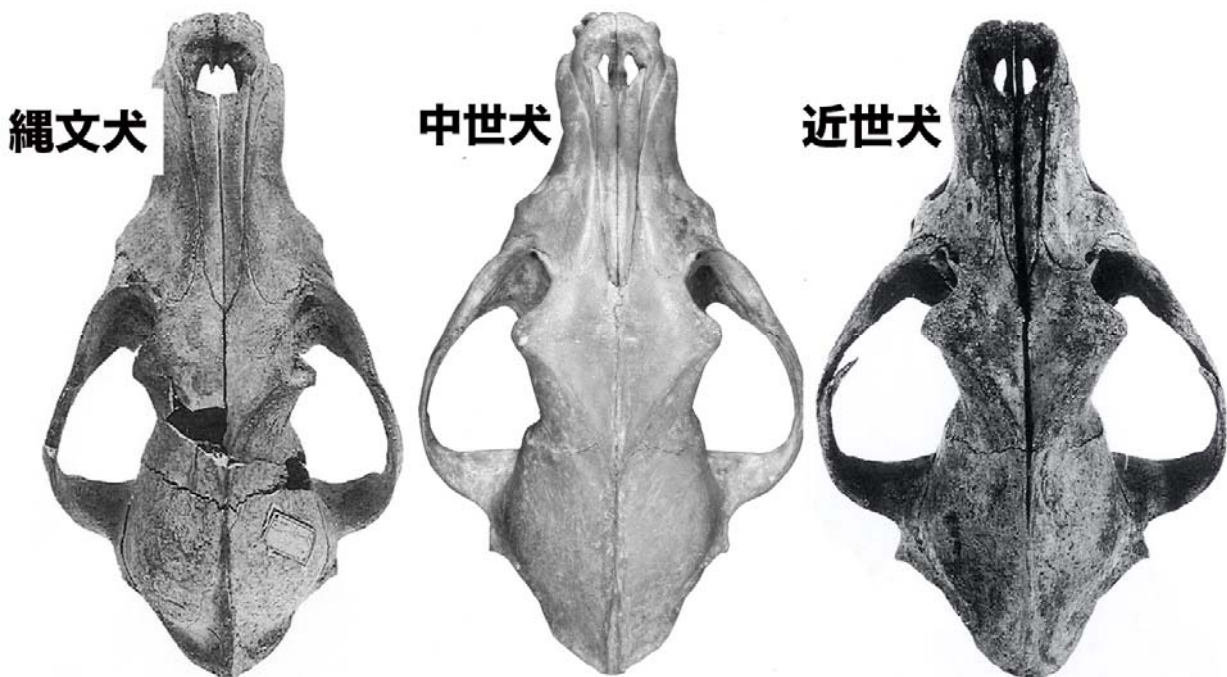
C、古代～中世のイヌ

古代～中世は、イヌの多様性が増し、かなり大型のイヌもみられるようになっていますが、遺跡から出土する数はずっと少なくなります。日本へ大陸からイヌが献上されたことは日本書紀などにも記されています。しかし、一般的なものではなく朝廷への献上品として持ち込まれたものですから、一般的なイヌへの影響は微々たるものであつたらうと思われ

れます。稲作が定着するようになるとイヌの役割も多様化

写真4：縄文犬と後代のイヌのプロポーションの違い。

縄文犬の顔の幅(頬骨弓の幅)が相対的に小さいことがわかります。プロポーションの違いをわかりやすくするためそれぞれの最大長を同じ大きさに合わせてあります。



してきます。平安時代の終わりころからイヌを狩猟の練習として用いる「犬追物」などが行われるようになりまし（金子2000）。さらに、鷹狩用のタカのえさとして使われる例もあったようです。例えば、愛知県の豊明市沓掛城址（16世紀中頃）から出土した大きめのイヌの頭蓋骨には頸を切断した痕跡や頭の筋肉をていねいにはぎとった痕跡が残っていました（茂原1985）。広島県の草戸千軒遺跡ではイヌが食用に売られていたと考えられています（松井；1999）。一方で、神奈川県鎌倉時代の千葉地東遺跡から出土したイヌは、幼犬では埋葬されていたものもありましたが、成犬での埋葬例はなく、バラバラの出土が多くなっています。しかし、解体痕のつく例はまれで、積極的に食べていたという証拠はあまりないといえます（金子1986）。

頭蓋骨の計測では、頭の長さに比べて幅（両側に張り出した頬骨弓）が大きくなっています（写真4）。比率では頭の横幅が大きくなっていることを示しています。これはおもに咬むために使われている咀嚼筋や歯への負荷が減少して、歯列を含む吻部が前後に短くなってきていることによる影響が大きいと思われます。

東北地方では、古墳時代から平安時代にかけての遺跡である市川橋遺跡（宮城県）から出土したイヌは、縄文犬に比べて大型で、やはり頭蓋骨は顔の広いプローションでした（菅原2001）。形態も変異に富んでいます。解体痕が見られるものもあります。

北方のサハリンのオホーツク文化期の古代遺跡から出土した鈴谷貝塚のイヌは、バラバラに出土しており、解体されていたらしいことがわかっています。イノシシのいない北方では食料としてイヌが利用されていた可能性があります（内山2014）。

D. 近世のイヌ

江戸時代には、外国から大きなイヌがもたらされていることは文献にも残されています（茂原1991、磯野・内田1992）。この時代には明らかに外国のイヌの影響を受けたと思われる大型のイヌが出土してい

ます。仙台市の仙台城三ノ丸遺跡から頭蓋最大長が176mmほどの中級犬が、また江戸の淡路町からは頭蓋最大長が183mmほどの中級犬が、さらには東京芝神明町屋跡遺跡からは頭蓋最大長が203mmの大きなイヌが出土しています。東京の仙台坂遺跡から出土のイヌ頭蓋骨最大長は約220mmで、シェパードよりも大きいほどです。長谷部の型区分ではイヌとしては最も大きな大級に相当する大きさです。これらのイヌには縄文犬に見られるような顕著な歯の損傷はありません。使われ方が異なっていたのでしょうか。

日本のイヌは、強いもの、あるいは大きいものが好まれるといったことはあったとは思われますが、品種改良の対象にはならなかった可能性があります。弥生時代から中世まで、次第に大きなものが増えていく傾向はうかがえます（図1）が、ブルドッグやダックスフントに見られるような形の変化はありません。ヨーロッパや中東では、古い時代からすでに人の要求するいろいろな機能により形や大きさが変わったイヌが産出されていたようです（Bokonyi;1974）。イヌは役に立つ道具と考えられていたのでしょうか。日本ではっきりとした品種改良の結果が見られるのは江戸時代になってからです。東京の汐留遺跡からも4品種以上のイヌが発掘されているといえます（西本他；2003）。これらが日本で産出されたものかどうかは不明です。中国からもたらされた小型のイヌが改良されてジャパニーズチンになったのも江戸時代から明治時代にかけてのこの時期です。

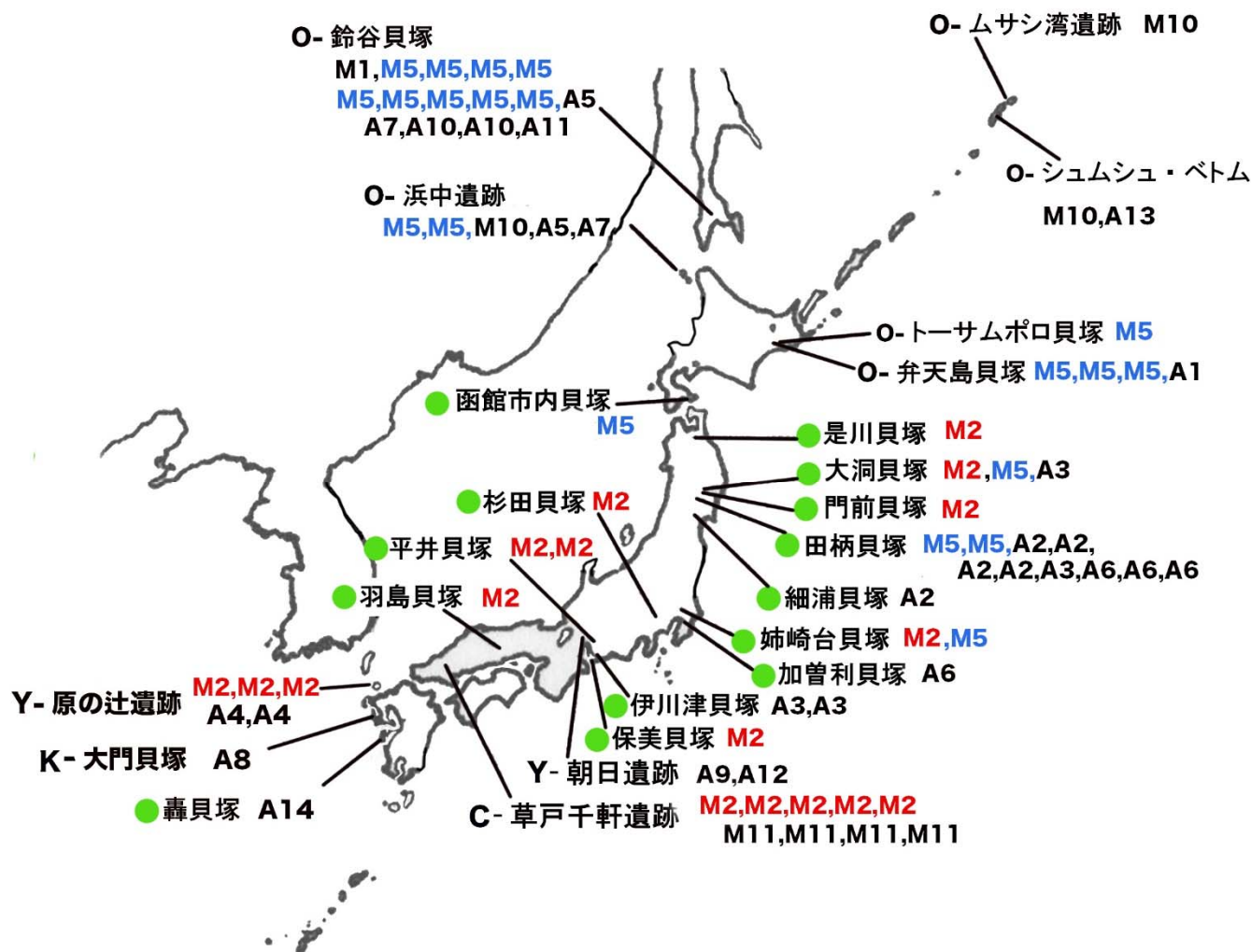
3. イヌの遺伝子の研究

イヌの遺伝子の研究はここ数十年で大きく進展しました。石黒（2003）のミトコンドリアDNAの研究によると、縄文時代のイヌにはかなりの遺伝的な多様性があることが明らかになってきました。その結果をまとめたものが古い時代の各地の遺跡から出土したイヌのミトコンドリアDNAのハプロタイプの分布状態です（図2）。同じ遺跡のイヌでもDNAのハプロタイプが違うイヌが含まれています。田柄貝塚のイヌ

図2：古代日本犬のミトコンドリア DNA のハプロタイプの分布。

石黒（2003）の原図に、色をつけてわかりやすくした。日本犬の基層と考えられるハプロタイプ **M2**（赤字）が縄文犬に多くみられます。南に多い **M2**（赤字）と北に多い **M5**（青字）の分布の違いがあります。

緑色の●は縄文時代の遺跡を示しています。Yは弥生時代、Kは古墳時代、Cは中世、Oはオホーツク



のハプロタイプの種類は多いがそれぞれはお互いに近い関係にあり、遺伝的にはかなりに通った集団であるといえます。

石黒の分析によれば日本の縄文時代のイヌには基本的にミトコンドリア DNA のタイプが南に多い M2 型と北に多い M5 型の 2 系統が存在していたといえます。その後の時代のイヌの分析では出土数が縄文時代と違って少ないのではっきりしたことは言えないが、日本以外から持ち込まれたと考えられるハプロタイプが各地で見つかっています。しかし、M2 型は

縄文時代以来現代に至るまでずっと日本のイヌに認められる型なので、M2 が日本在来犬の基層をつくったものです。この型は東北地方や関東地方、東海地方、中国地方、九州地方などいろいろの遺跡から見つかっています。そのうち、大陸から別の遺伝子をもったイヌが持ち込まれて混血してできあがったのが現在の多様な日本在来犬です（写真 6）。北の影響を大きく受けているかと思われる北海道犬にはハプロタイプ M5 が見つからないので、弥生時代以降に大陸から移入されたイヌの影響があるようだとい

写真5：復元された日本の旧石器オオカミ（葛生オオカミ）と縄文犬。

国立歴史民俗博物館の展示物として復元されたものです。葛生オオカミの大きさがわかります。

います（石黒 2003）。

遺伝子の研究でもイヌの複雑さが証明されたようなもので、系統をはっきり追うことはなかなかむずかしいようです。現在のところこれらのハプロタイプ

写真6：現生の日本在来犬のいろいろな犬種の頭蓋骨。北海道犬は早のものだが他はひのものです。大きさも形も多様です。

旧石器オオカミ（葛生オオカミ）



と形態との関係は研究されておらず、まだわからないことが多い状態です。いろいろな視点を持って研究していきたいものです。形態はその生活を反映するものであり、形と機能の解析が必要です。それによって明らかになることも多いと思われれます。

4、日本にいたオオカミ

イヌの起源がオオカミであるという考え方が一般的になってきました。日本には小型のニホンオオカミがいたのでそれが家畜化されたのではないかという説は以前からありました。しかし、遺伝的な研究から、そのような考え方は認められ



図3：各時代のイヌ及びオオカミの大きさの比較。

石黒（2012）の原図をもとに中世犬も加えてわかりやすいように着色しました。各イヌやオオカミの大きさはあくまでおおよそのものです。縄文犬は小さく、図1でもわかるように、日本の在来犬は弥生時代から次第に大きくなる傾向があります。日本には2種類のオオカミがいましたが、旧石器オオカミの陸封型がニホンオオカミである可能性が高いと思われます。

ませんでした。やはりニホンオオカミはタイリクオオカミやチョウセンオオカミの方に近いことが明らかにされています。(石黒 2012)。ニホンオオカミは遺伝的な多様性が小さいので、日本に渡ってきたのは小さな集団であったと推測されています。ニホンオオカミはタイリクオオカミより一回り小さく(図 3)、明治時代まで日本に生存していました。北海道にはやはり明治時代まで、ニホンオオカミより大きなエゾオオカミが生息していました。

これとは別に、日本の旧石器時代には大きなオオカミがいました。葛生オオカミとして知られていますが、現在のタイリクオオカミのように大きなオオカミが日本列島にいたことがわかっています(直良 1965)(写真 5)。このオオカミは、絶滅したニホンオオカミよりもかなり大きなオオカミで、エゾオオカミと同じくらいの大きさです。

ニホンオオカミと日本在来犬の交雑があったことを示す明確な遺伝的な証拠はないといえます(石黒 2012)。今後の遺伝子での研究が待たれます。

5. おわりに

古代のイヌの研究史で初期に議論を展開したのは齊藤弘吉や長谷部言人です。齊藤(1940-1941)は古代犬についても報告しています。そのなかでも 1963年にイヌの詳細な計測方法を説明する冊子を残しており、その後の日本在来犬の形態研究の基礎をつくりました。長谷部(1952)は古代日本在来犬についての報告を多く残していますが、1952年には吉胡貝塚のイヌについての報告の中で古代犬の大きさの基準について述べています(図 1)。その後の古代犬の報告ではその基準が用いられるようになりました(長谷部は大級、中大級、中級、中小級、小級と区分していますが、大型、中型、小型としている人もいます。一般的に用いられる大型とか小型とか混同しやすいので報告では「級」を使うことを推奨します)。その後、金子はその豊富な経験と情報量を駆使して日本の古代のイヌに多くの発掘例や総説を報告しています(1976、1989、2000など)。

シバイヌ♂



甲斐犬♂



四国犬♂



北海道犬♀



紀州犬♂



秋田犬♂



5 cm

現在、日本在来犬はペットとして飼われることが多くなりましたが、ペットとしてだけでなく姿、形、性格を求める人々もいます。そのような人々によって日本在来犬の伝統は受け継がれており、どのように展開していくか興味深いものがあります。

た方の努力に敬意を表します。石黒直隆氏には遺伝に関する多くの教をいただいています。心から感謝いたします。金子浩昌先生には昔からイヌに関するいろいろな情報を丁寧に教えていただきました。厚く御礼申し上げます。

この文章をまとめる機会を与えてくださった縄文柴犬研究センターの皆さん、土井鐵徳さん、また原稿を丁寧に読んで貴重な意見をくださり、イヌ関係の文献をまとめる機会をつくって下さった五味靖嘉さんに心から感謝いたします。(2020.06.15)

謝辞： 使わせて頂いた日本在来犬の写真のそれぞれの所在はここに記しませんが、これらを集められ

参考文献

- Bokonyi, S. (1974) : History of Domestic Mammals in Central and Eastern Europe. Akademiai Kiado, Budapest, 313 - 333.
- Gakuhari, T. Komiya, H., Sawada, J., Anezaki, TY., Sato, T., Kobayashi, K., Itoh, S., Kobayashi, K., Matsuzaki, H., Yoshida, K. & Yoneda. M. (2015) : Radiocarbon dating of one human and two dog burials from the Kamikuroiwa rock shelter site, Ehime Prefecture. *Anthrop. Sci.*, 123(2), 87 - 94.
- 長谷部言人 (1952) : 犬骨。埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」,文化財保護委員会, 146 - 150。
- 石黒直隆 (2003) : 古 DNA 分析で探る縄文犬の系統。考古学ジャーナル, 501, 11 - 15。
- 石黒直隆 (2012) : 絶滅した日本のオオカミの遺伝的系統。日本獣医師会雑誌, 65(3), 225 - 231。
- 磯野直秀・内田康夫 (1992) : 舶来鳥獣図誌---唐蘭船持渡鳥獣之図と外国産鳥之図。八坂書房。
- Jing Yuan& S. Kato (袁靖 & 加藤晋平) (1993) : On the cut marks on small-sized animal bones excavated from the Oshita Shellmound, Ibaraki Prefecture, Japan. *Bull. Nat. Hist. Mus. & Inst.*, Chiba, 2 (2), 37 - 43.
- 鎌田祐二 (1998) : 縄文時代のヒトとイヌの合葬墓---岩手県宮古市近内中村遺跡。動物考古学, 11, 75 - 87。
- 金子浩昌 (1976, 1978) : 縄文遺跡出土の動物遺存体 (1, (2)。考古学ノート, 6, 1 - 19, 7, 1 - 20。
- 金子浩昌 (1986) : 千葉地東遺跡の動物遺体。神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告, 10「千葉地東遺跡」, 神奈川県立埋蔵文化財センター, 579 - 588 図版 103 - 110。
- 金子浩昌 (1989) : 縄文時代のイヌ---人とのかかわりの中から。考古学ジャーナル, 303, 6 - 14。
- 金子浩昌 (2000) : 動物と人との交渉史。平出博物館ノート, 14, 1 - 14。
- 松井 章 (1999) : 考古学からみた犬。部落解放なら, 第11号, 7 - 25。
- 中村若枝 (2011) : 横浜外国人居留地のイヌたち---横浜市山下居留地遺跡出土埋葬犬をめぐって。考古論叢神奈河第19集, 神奈川県考古学会, (2011), 21 - 49。
- 直良信夫 (1965) : 日本産狼の研究。校倉書房, Pp.290。
- 西本豊弘・小林園子・樋泉岳二・太田敦子 (2003) : 汐留遺跡出土の動物遺体。東京都埋蔵文化財センター, 214 - 262。
- 斎藤弘吉 (1940 - 41) : 日本石器時代家犬遺骨に関する報告ならびに内地史前家犬の分類。史前学雑誌, 12(4,5,6), 13 (3), 57 - 169。

- 斉藤弘吉 (1963)：犬科動物骨格計測法。私家版(東京), Pp138。
- 茂原信生 (1985)：沓掛城址出土の犬骨について。「沓掛城址第四次発掘調査報告書, 豊明市教育委員会, 15 - 23。
- 茂原信生 (1986)：東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ」, 東京大学総合研究資料館標本資料報告 第13号, 東京大学総合研究資料館, Pp. 187。
- 茂原信生 (1991)：日本犬に見られる時代的形態変化。国立歴史民俗博物館研究報告, 第29集, 国立歴史民俗博物館, 89 - 108。
- 茂原信生・松井 章 (1995)：草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨。「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ---南部地域北半部の調査」, 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編, Ⅲ, 289 - 312。
- 茂原信生 (2007)：形から探るイヌ。生物科学, 58 (3), 130 - 139。
- 茂原信生・江木直子(2002)：イヌ *Canis familiaris* に関する文献集 (日本で出版された文献)。人類学雑誌, 110(2), 89 - 104。
- 篠田謙一 (2019)：日本人になった祖先たち---DNA が解明する多元的構造。NHK Books, Pp. 236。
- 菅原弘樹 (2001)：動物遺体。「市川橋遺跡」, 宮城県文化財調査報告書, 宮城県教育委員会, 184, 203 - 233。
- 内山幸子 (2014)：イヌの考古学。同成社, Pp. 267。
- 山田康弘 (1993)：縄文時代のイヌの役割と飼育形態。動物考古学, 1, 1 - 17。
- 山田康弘 (1997)：縄文家犬用途論。動物考古学, 第8号, 37 - 53。
- 山崎 健・茂原信生 (2007)：埋葬犬。「国指定史跡吉胡貝塚 (1)」, 田原市埋蔵文化財調査報告書第1集, 田原市教育委員会, 86 - 92。
- 山崎京美 (1985)：縄文文化におけるイヌの埋葬について。國學院雑誌, 86 (2) , 27 - 65。

茂原信生先生の紹介

茂原信生(しげはら のぶお)先生は1943年生、長野県出身。京都大学名誉教授。経歴などは多岐におよび、私が簡単に紹介する立場ではありませんので、ここでは、JSRCと私の30年余の関わりから、一部分ですがご紹介させていただきます。

先生は、主に自然人類学が研究のテーマで、霊長類からヒトの進化を研究されています。その中の一つに、日本人および日本犬の起源と形態の変遷が含まれます。

私が頭骨の標本に興味を抱いた「ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの-歴史的实验としての将軍とイヌ-」(歯界展



望、70,6)など、その後の縄文柴犬の考え方を考える事になりました。

先生が獨協医大在籍時には、収集した標本から、哺乳類頭蓋骨のデータベースを作製しております。これはインターネットで公開されていて、将来的に研究・教育に役立つ標本とされると伺いました。私も犬の骨格計測の参考に、何度か勉強させていただきました。そうしたこれまでの過程には、常に、的確な優し

いアドバイスがあり、誠実な人柄に触れ勉強の支えとなりました。

趣味と云えるのか分かりませんが、ご夫妻でバードウォッチングをされています。(五味)

茂原信生先生のイヌとオオカミ関連文献目録

(筆者名、発行年、表題、雑誌名、巻、号、頁) (年代)

- 茂原信生 (1973)：縄文時代のイヌ-南境貝塚出土犬骨癒合例について。矢本町史, 1, 63 - 64。(縄文時代中期のイヌ)
- 茂原信生・江藤盛治・馬場悠男 (1980)：宇賀崎貝塚出土の人骨および犬骨について。宮城県文化財調査報告書, No.67, 121 - 126。(縄文時代のイヌとされているが後代のものではないかという意見がある)
- 茂原信生・小野寺覚・桜井秀雄(1982)：乙女不動原北浦遺跡出土の哺乳動物遺存体。「乙女不動原北浦遺跡」, 小山市教育委員会, 433 - 436。(縄文時代のイヌとされるが時代は確定されていない)
- 茂原信生・小野寺覚 (1984)：田柄貝塚出土の犬骨について。人類学雑誌, 92 (3), 187 - 210。(縄文時代後・晩期のイヌ)
- 茂原信生・桜井秀雄 (1985)：南坪貝塚発掘調査報告書, 茨城県小川町教育委員会, 70 - 113。(縄文時代後期のイヌ)
- 茂原信生・小野寺覚 (1985)：仙台城三ノ丸跡出土の17世紀犬骨について。「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集, 547 - 559。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生・西本豊弘・松井章・土肥孝 (1985)：古代家犬の系統に関する研究。文部省科学研究費 補助金研究成果報告書, 1 - 61。
- 茂原信生 (1985)：沓掛城址出土の犬骨について。沓掛城址第四次発掘調査報告書, 15 - 23, 図版 21 - 23。(中世のイヌ)
- 茂原信生 (1986)：東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ。東京大学総合研究資料館標本資料報告, No.13, Pp, 187。
- 茂原信生・小野寺覚 (1986)：田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について。「田柄貝塚」, 宮城県文化庁, 宮城県文化財調査報告書 111 集, 589 - 672。(縄文時代後・晩期のイヌ)
- 茂原信生・瀬戸口烈司 (1986)：食肉類 (目) (Carnivora)。歯の比較解剖学 (医歯薬出版, 後藤仁敏, 太泰司紀之編), 166 - 171。

- 小野寺覚・茂原信生・江藤盛治(1987): 骨格による性の判別--シバイヌについて。解剖学雑誌, 62, 19 - 32。
- 茂原信生(1987): ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの - 歴史的実験としての将軍とイヌ。医歯薬出版株式会社, 歯界展望, 70, 4, 711 - 719。70, 5, 947 - 955。70, 6, 1185 - 1194。
- 茂原信生・小野寺覚(1987): 鎌倉材木座遺跡出土の中世犬骨。人類学雑誌, 95No.3, 361 - 379。(中世のイヌ)
- 茂原信生(1988): イヌと将軍に学ぶ。歯界展望, 71(2), 333 - 337。
- 茂原信生(1988): 285号遺構出土のイヌ。白金館址遺跡(I)白金館址遺跡調査会, 194 - 196。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生・大江文雄・桜井秀雄(1988): 三貫地貝塚出土の動物遺存体。「三貫地貝塚」, 福島県立博物館調査報告第17集, 495 - 501, 図版84 - 95。(縄文時代後晩期のイヌ)
- 茂原信生・馬場悠男・芹沢雅夫(1988): 薄磯貝塚出土の家犬およびオオカミ。いわき市埋蔵文化財調査報告書第19冊, 558 - 571。(縄文時代晩期)
- 茂原信生(1988): 太古から犬は人の友だった。アニマ, 189, 98 - 101。(このレポートは出版社が 進入路を裏返しに印刷したミスのため図は正しくない)
- 茂原信生(1989): 古代日本犬の形態変化。考古学ジャーナル, 303, 22 - 27。
- 茂原信生(1989): 38号遺構出土の犬骨「西新橋二丁目 港区No.19 遺跡」港区教育委員会, 267 - 272, Pl62。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生(1989): 百間川米田遺跡(中世)出土の犬骨。「百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡)」, 岡山県教育委員会, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告, 74, 372 - 374。(中世のイヌ)
- 茂原信生・芹沢雅夫・桜井秀雄(1989): 浜野川神門遺跡出土の脊椎動物遺存体。「千葉市浜野川神門遺跡(低湿地貝塚の発掘調査)」, 千葉県文化財センター調査報告 第159集, 77 - 87 図版23 - 34。(縄文前期のイヌ。一部に古墳時代のイヌが混じる)
- 茂原信生・芹沢雅夫(1990): 仙台坂遺跡出土の犬骨。品川区埋蔵文化財調査報告書「仙台坂遺跡」品川区遺跡調査会, 171 - 180。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生(1990): 里浜貝塚出土の犬骨。里浜貝塚V, 東北歴史資料館, 107 - 114, 写真30, 31。(縄文晩期のイヌ)
- 茂原信生(1990): 食肉類にみられる歯列不正。哺乳類科学, 30, 1, 53 - 58。
- 茂原信生(1990): 芝金杉通町家遺跡出土の犬骨。港区立港郷土資料館研究紀要, 1, 105 - 112。(江戸時代のイヌ)
- 茂原信生(1991): 日本犬に見られる時代的形態変化。国立歴史民俗博物館研究報告, 29, 89 - 101。
- 茂原信生・本郷一美・網谷克彦(1991): 鳥浜貝塚出土(1985年度調査)の哺乳類遺存体。国立歴史民俗博物館研究報告, 29, 329 - 342。(縄文時代前期のイヌ)
- 茂原信生・石毛直道・田名部雄一・小山修三(1991): 人類とともに動いた動物, 犬。平成3年度文部省科学研究費補助金, モンゴロイド, No.11, 2 - 9。
- 茂原信生(1991): イヌも歯を病んでいる。医歯薬出版株式会社デンタルハイジーン, 11(12), 1093 - 1107。
- 平口哲夫・茂原信生(1992): 金沢市西念南新保遺跡出土のイヌ頭蓋骨。金沢市西念・南新保遺跡, 295 - 29 図版イヌ頭蓋骨。(弥生時代後半のイヌ)
- shigehara, N., Matsu'ura, S., Nakamura, T. and Kondo, M. (1993): First discovery of the ancient Dingo - type dog in Polynesia(Pukapuka, Cook Islands). International Journal of Osteoarchaeology, 3, 315 - 320
- Shigehara, N, (1994): Morphological changes in Japanese ancient dogs. Archaeozoologia, IV (2), 78 - 94.
- 茂原信生・芹沢雅夫(1994): 中田南遺跡出土の人骨と脊椎動物遺存体。仙台市文化財調査報告書, 182, 「中田南遺跡」,

423 - 431。(中世のイヌ)

茂原信生 (1994) : 忘れられた歯---犬歯。歯界展望, 84, (5), 1220 - 1225。

茂原信生 (1995) : 城ノ台南貝塚出土の縄文時代早期犬骨。千葉大学考古学教室「城ノ台南貝塚発掘調査報告書」, 266 - 269。図版 64。(縄文早期のイヌ)

茂原信生・松井 章 (1995) : 草戸千軒遺跡出土の中世犬骨。広島県草戸千軒町遺跡調査研究所羅草戸千軒遺跡発掘調査報告 III, 289 - 312。(中世のイヌ)

茂原信生・松井 章 (1995) : 原の辻遺跡出土の動物遺存体。長崎県教育委員会, 長崎県文化財調査報告書 第 124 集「原の辻遺跡」, 189 - 207。(弥生時代のイヌ)

茂原信生 (1995) : 米田遺跡(岡山県, 鎌倉~室町時代) 出土の人骨と犬骨。岡山県教育委員会, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 101「米田遺跡」, 61 - 68。(中世のイヌ)

茂原信生 (1995) : 飯田町遺跡出土の江戸時代犬骨。飯田町遺跡調査会「飯田町遺跡」, 433 - 437。(江戸時代のイヌ)

茂原信生 (1995) : 水子貝塚の埋葬犬骨。「水子貝塚」, 富士見市教育委員会, 富士見市文化財報告 第 46 集, 205 - 207。(縄文時代のイヌ)

茂原信生・桜井秀雄 (1996) : 吹田市五反島遺跡出土獣骨。吹田市五反島遺跡発掘調査報告書(自然科学編), 63 - 107。(中世のイヌ)

茂原信生・松島和巳 (1996) : 中村中平遺跡から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片。飯田美術博物館研究紀要 6, 137 - 151 (1996, 3)。(縄文晩期のイヌ: 焼骨)

平口哲夫・溝口優司・小川数也・茂原信生 (1996) : 八間道遺跡出土の動物遺体。八間道遺跡一平成 8 年度公立加賀中央病院改築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一 加賀市教育委員会, 267 - 281。(江戸時代のイヌ)

茂原信生 (1996) : 安子島城跡(郡山市) 出土の中世の犬骨。「安子島城跡」, 郡山市教育委員会, 郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書, 134 - 145。(中世のイヌ)

茂原信生 (1997) : 石川条里遺跡水田出土の人骨と獣骨。埋蔵文化財発掘調査報告書(長野県教育委員会), 15, 676 - 682。(弥生時代後期のイヌ)

茂原信生 (1997) : 石川条里(微高地) 遺跡(長野市) 出土の古墳時代ならびに中世の人骨と獣骨。長野県教育委員会, 長野県埋蔵文化財センター, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15, 長野市内 その 3 - 石川条里遺跡第 2 分冊, 402 - 417。(中世のイヌ)

増田雄一・茂原信生 (1997) : 日本産食肉目の種名の検討。哺乳類科学, 37 (1), 87 - 93。

桜井秀雄・茂原信生 (1997) : 篠ノ井遺跡出土の動物遺存体。「篠ノ井遺跡群」, 成果と課題編, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書, 16, 246 - 274。(弥生時代のイヌ)

Shigehara, N., S. Onodera & M. Eto (1997): Sex determination by discriminant analysis and evaluation of non-metrical traits in the dog skeleton. in "Osteometry of Makah and Coast Salish Dogs", Edit. by S. J. Crockford, 113-126.

Shigehara, N., Qi Guoqin, Hajime Komiya, Yuan Jing (1998): Morphological Study of the Ancient Dogs from Three Neolithic Sites in China. International J. of Osteoarchaeology, 8, 11- 22.

Shigehara, N., (1998): Book Review, A History of Dogs in the Early Americas. Marion Schwartz ., American Scientist, 1998, August, 389.

茂原信生 (1998) : 上信越自動車道屋代遺跡群から出土した獣骨と人骨。「更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)」, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 25---更埴市内その 4, 229 - 232。(弥生~古墳時代のイヌ)

茂原信生 (1998) : 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡出土の人骨と動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 34,

「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 5---長野市内その2」, 246 - 254。(近世?のイヌ)

Okumura, N., N. Ishiguro, M. Nakano, A. Matsui, N. Shigehara, T. Nishimoto, and M. Sahara, (1999)
: Variations in Mitochondrial DNA of Dogs isolated from Archaeological Sites in Japan and
Neighbouring Islands. *Anthropological Science*, 107(3), 213 - 228.

Shigehara, N. & Hongo, H, (2000): Ancient Remains of Jomon Dogs from Neolithic Sites in Japan.
In *Dogs Through Time, An Archaeological Perspective* (ed. S. J. Crockford). BAR International Series,
889, 61 - 67。(縄文時代のイヌ)

茂原信生・桜井秀雄・今野 渉 (1999) : 上信越自動車道屋代遺跡群出土の脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター
発掘調査報告書, 42「更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡・窪河原遺跡)」, 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報
告書, 26---更埴市内その5(古代1編), 342 - 378。(古代のイヌ)

茂原信生 (1999) : 榎田遺跡(長野市)出土の人骨と脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 37, 「上信
越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 12 ---長野市内その10 榎田遺跡第2分冊(本文編II)」, 392 - 413。(5世紀、古代
のイヌ)

茂原信生 (2000) : 人骨及び骨角牙製の遺物(松原遺跡)。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (長野県教育委員
会), 36, 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書, 5---長野市内その3」, 339 - 353。(弥生時代中期のイヌ)

茂原信生 (2000) : 第2節 脊椎動物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 53, 「上信越自動車道埋蔵文
化財発掘調査報告書, 6---長野市内その4---松原遺跡 古代・中世本文編, 400 - 422。(古代~近世のイヌ)

桜井秀雄・芹澤雅夫・茂原信生 (2000) : 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・窪河原遺跡出土の古代2・中世・近世の脊椎動
物遺存体。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50「更埴条里遺跡・屋代遺跡群・古代2・中世・近世編」, 239 -
251。(古代以降の中大級のイヌ)

Ishiguro, N., Okumura, N., Matsui, A. & Shigehara, N. (2000) : Molecular genetic analysis of ancient Japanese Dogs. in *Dogs Through
Time: An archaeological perspective*. Edit. by S. J. Crockford, BAR International Series, 889, 287-292.

茂原信生・本郷一美 (2000) : 鳥浜貝塚(福井県)出土の縄文時代前期のイヌとオオカミ。鳥浜貝塚研究, 2, 23-40。(縄文時
代前期のイヌ)

茂原信生 (2002) : 保地遺跡出土の獣骨の観察記録, 特にオオカミを中心として。坂城町埋蔵文化財調査報告書第20
集, 「金井遺跡群一保地遺跡」, 94 - 97。(縄文時代のオオカミ)

茂原信生・江木直子 (2002) : 荒井猫田遺跡出土の中世ニホンオオカミの全身骨格。郡山南拠点土地区画整理事業関連
「荒井猫田遺跡(II区)」第14次発掘調査報告書, 291 - 302。(中世のオオカミ)

茂原信生・江木直子 (2002) : イヌ *Canis familiaris* に関する文献集(日本で出版された文献)。人類学雑誌, 110, (2), 89 -
104。

茂原信生 (2003) : 縄文人はどのようにイヌと付き合ったか。考古学ジャーナル, 501, 6 - 10。(縄文時代のイヌ)

茂原信生・土肥直美 (2003) : 笠利町宇宿小学校構内遺跡出土の埋葬犬骨(縄文時代前期, 鹿児島県)。奄美考古(特集
宇宿小学校構内遺跡発掘調査報告) 奄美考古学研究会, (5), 53 - 60。(縄文時代前期のイヌ)

茂原信生 (2003) : 子と清水貝塚出土の犬骨。松戸市立博物館紀要10(松戸市教育委員会), 59 - 68。(縄文中期のイヌ)

茂原信生・平口哲夫・櫻井秀雄 (2004) : 三引遺跡出土のイヌならびに他の中・小型哺乳類。一般国道470号線改良
工事及び主要地方道氷見田鶴浜線建設工事に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(VIII), 「田鶴浜町三引遺跡II(下層
編)」石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター, 305 - 331。(縄文早期末~前期初頭のイヌ)

茂原信生 (2004) : 須坂市井上・幸高遺跡群, 井上氏居館址南堀跡から出土した人骨と獣骨。長野県須坂市市道園芸高校井
上線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「井上・幸高遺跡群, 井上氏居館址南堀跡」, 須坂市教育委員会, 35 -

42. (古墳から近世：オオカミか大型のイヌ)

茂原信生 (2004) : イヌの形はどのように変わってきたか。形の科学百科事典, 形の科学会編集, 175 - 176。

Intoh, M., Shigehara, N. (2004): Prehistoric Pig and dog remains from Fais Island, Micronesia.

Anthropological science Vol. 112, 257-267.

茂原信生 (2005) : 三引遺跡出土の縄文時代犬骨に関する考察。一般国道 470 号線(能越自動車道)改良工事及び主要地方道氷見田鶴浜穿孔地に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (IX) [七尾市三引遺跡IV], 石川県教育委員会, 財団法人石川県埋蔵文化財センター, 63 - 70。(縄文時代のイヌ)

茂原信生 (2007) : 特集.イヌの生物学—形から探るイヌ。生物科学, 58, 3, 130 - 139。

茂原信生 (2007) : 小特集. あなたの犬はどこからきたのか—イヌの遺伝子からわかること 2, 古代犬の形態と現在日本犬。生物の科学遺伝, vol. 61. 4, 62-65。

山崎 健・茂原信生 (2007) : 埋葬犬(吉胡貝塚)。「国指定史跡吉胡貝塚(I)」, 田原市埋蔵文化財調査報告書 第 1 集, 86 - 92。(縄文時代晩期のイヌ)

茂原信生 (2007) : 古代犬の形態と現在の日本犬。遺伝, 61 (4) , 62 - 65。

茂原信生・平口哲夫 (2008) : 石川県珠洲市粟津小学校遺跡出土の中世犬骨。県営中山間地域総合整備事業(三崎地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書「珠洲市粟津小学校遺跡」, 石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター, 93 - 99。(中世のイヌ)

茂原信生 (2008) : 横浜市中区 No.2 遺跡(元町貝塚)出土の縄文時代犬骨。「中区 No.2 遺跡発掘調査報告」, 横浜市ふるさと歴史財団, 103 - 110。(縄文時代前期末～中期初頭のイヌ, 時代は不明確)

茂原信生 (2009) : 長谷部言人の学位論文「石器時代日本犬」についての解題。動物考古学, 26, 82 - 83。

Ishiguro, N., Inoshima, Y., & Shigehara, N. (2009): Mitochondrial DNA analysis of the Japanese wolf (*Canis lupus hodophilax* Temminck, 1839) and comparison with representative wolf and domestic dog haplotypes. Zoological Science, 26, 765-770.

Ishiguro, N. Inoshima, Y., Shigehara, N., Ichikawa, H. & Kato, M. (2010) : Osteological and genetic analysis of the extinct Ezo wolf (*Canis lupus hattai*) from Hokkaido Island, Japan. Zoological Science, 27, 320-324.

茂原信生・石黒直隆・江木直子 (2011) : イヌとネコはどこから来たのか? ニュートン, 2011年10月号, 52 - 57。

山崎 健・橋本裕子・茂原信生 (2011) : 京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室所蔵の動物標本---とくに動物遺存体と動物化石について。動物考古学, 28号, 95 - 111。

桜井秀雄・茂原信生・本郷一美 (2015) : 西近津遺跡群出土の動物骨について。長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104, 「佐久市 西近津遺跡群---中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2-佐久市内 2」, 長野県埋蔵文化財センター, 239 - 245, Pl. 309 - 311。(中世のイヌ)